

達成の文脈での気分の変化に及ぼす 子どもの能力認知の仕方について

筑波大学心理学系 丹羽 洋子

Manipulation of children's perceived competence as a determinant of mood in achievement related contexts

Yoko Niwa (Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan)

The present experiment tested the hypothesis that perceived competence is a determinant of positive-negative moods. Changes in perceived competence were induced by having subjects have positive or negative self-evaluative image. A sample of 73 6th graders were selected on the basis of extreme scores of characteristic depression on the depression scale developed for children by Kavacs and Beels (1977), and were assigned to depression groups or normal groups. The induction of positive versus negative cognitions produced significant differences in normal-depression children. Characteristically depressed and non-depressed subjects were able to take on opposite mood states. The study supported the utility of cognitive therapy for depressives, and demonstrated a potentially useful technique for inducing more appropriate self-evaluations.

Key words : mood, perceived-competence, depression, achievement motivation, school age children

過去の臨床的データにもとづけば、「そう病の人は自己の能力について過大評価し、鬱病の人は自己否定的である」ことが知られ、認知された能力に及ぼす気分の影響について推測することができる。ところが、これまでの動機づけの分野では、このような「感情(気分)」→「認知(能力認知)」への方向性に関しては、ほとんど取り上げられてこなかった。

かつてから動機づけ研究のなかで考慮されてきた感情(気分)といえば「テスト不安」に関するものが唯一であった。その後最近では臨床の分野で抑鬱(depression)についての研究がなされるようになり、発達の分野でも児童・生徒のLH理論とdepressionについて注目されるようになってきた。したがって現在のところ「気分」について考えるとき、depression研究が唯一その手がかりとなると思われる。

臨床的・病理学的データでは、depressionとself-esteemの関係について古くから言及されている。Velter(1967)は、高揚-抑鬱の患者の気分の決定因はself-esteemであるとの理論を提出している。そ

れに基づいて、高揚・抑鬱レベルの極端な患者を選んで、自己の望ましいself-esteemについてのフィードバックを行うことにより、その後高揚-抑鬱レベルが再び測定された。しかし、認知的フィードバックによって高揚-抑鬱のレベルが改善されたとしても、self-esteemを変える事によって、高揚や抑鬱の人に典型的に見られるarousalの喚起や不安・深い悲しみなどの、永続的でないmildな感情変化が果して起こりうるのかどうかについては、この結果からだけでは一般化できないと思われる。さらに、高揚-抑鬱レベルの極端な患者の感情レベルが改善されたとしても、果して普通人についてもself-esteemが高低することによって、気分(感情レベル)が変化しうるものなのかどうかについては疑問が残される。

かつてBeck(1967)も、抑鬱患者の自己概念を容させるための認知的セラピーを主張してきた。しかし、抑鬱状態への認知的セラピーについての統制された実験や実証的研究はなされておらず、さらなる検討が必要と思われる。

その後、Velten(1968)の理論に立って、高揚と抑鬱の婦人について気分の変化に及ぼす self-esteem の効果について検討したものに Coleman (1975)がある。彼は、Elation vs. Depression scale を用いて極端な高揚と抑鬱の婦人を選び出し、対人場面での positive な self-esteem (ex. 私は好ましい人間で、人付き合いもうまく、自分に自信がある) または negative な esteem (ex. 私は何事もうまくいかず、親友もいない) をもつ自己についての記述を読ませ、その様に振舞うよう教示された。その結果、抑鬱の被験者については、positive な self-esteem によって高揚の気分を経験し、課題(数字を書く)のスピードが増し、次回の課題の成功への期待が高まった。一方高揚の被験者にとっても、negative な self-esteem によって抑鬱の気分を経験することが明らかとなった。以上から self-esteem は高揚・抑鬱の決定因となると考察された。negative な self-image によって抑鬱状態へと導かれると考えられた。しかしこのように、高揚・抑鬱の感情のみでなく、self-esteem は果してその他の感情 (positive affect や negative affect) にも影響するものなのであろうか。

この点に関して、援助行動の研究分野で興味深い研究が見いだされた。Barnett, Thompson & Pfeifer (1984)は、「自らが他人を助ける能力があるという信念を持つことにより、共感性が喚起され、援助行動が促進される」という仮説を検証すべく以下のような実験を行っている。72人の大学生が高援助能力 (helping-competence) 群・無関係能力群・統制群の3群に分けられ、各々 action-oriented problem-solving test と figure-perception test を実施した。その結果について、高援助能力群には「すぐれた対人的能力があり援助スキルがある」とフィードバックし、無関係能力群には「図形認知能力が高い」と評定し、統制群は何の評価もなされなかった。その後大学のカウンセリング室をおとずれたクライアントのビデオテープを見せられ、それについての感情反応が測定された。結果、自分が援助の能力があると認知させられた被験者(高援助能力群)は他の2群の被験者より、ビデオのクライアントに対してより共感的な感情反応を行っていた。このことから、自分が援助の能力があると信じることによって、共感性が喚起されることが明らかになった。

高揚・抑鬱の患者のみでなく、普通の児童にも、達成行動の分脈でこれと同様の結果が見いだせるであろうか。学校場面における達成についての「能力認知」によって「現在の気分」が影響されるかどうかについて検討することを本研究の目的とする。し

たがってここでは、「能力認知」のうち「有能感」のみをとりあげて、現在持っている有能感(無能感)のレベルとは関係なく、すべての子どもについて有能感の上昇および下降が認知的に操作されることによって、気分が高められたり低められたりするか (positive affect や negative affect が直接影響をうけるか) について調べることを第1の目的とする。

またさらに教育的適用の面から、教室場面においてやる気を失いがちな子ども一すなわち depression の傾向が見られる子どもについても、子どもの能力についての認知的操作によって気分を変容することが可能かどうかについて、普通児と比較することによって検討することを第2の目的とする。

仮説としては、

- ①認知的に有能感の上昇または下降を導くことによって、気分に変化が生じる。
- ②depression の傾向が見られる子どもについても、自己の有能感が認知されることによって、Positive な気分が喚起される。
- ③depression の傾向の子どもは、普通児と比べて、たとえ有能感を認知することによって気分が改善されたとしても、Positive な気分の喚起のレベルは低いであろう。

<方 法>

被験者 神奈川県下の公立小学校 6年生 73名 (男女約同数)

実験計画 2情緒状態(depression・普通)×3能力認知(positive・neutral・negative)＜情緒状態は被験者間、能力認知は被験者内要因＞

手続き ①実験に先だって、1週間前に Kavacs & Beck (1977) の作成した子どもについての depression 測定尺度を実施した。

②まず最初 neutral 条件での気分を測定するため、被験者は学校場面における気分測定尺度(丹羽 1989)が評定された。

③次に、現在学業に対して持っている各々の有能感のレベルとは別に、いずれの子どもについても何らかの達成に関する有能感を等しく認知させるために「1)他人の人と比べて、自分で自信をもっていること。2)人に自慢できると思うこと。」について自由記述が求められた。

④能力認知 negative 条件での気分を測定するため、「あなたが自信を持っていることまたは自慢できることが、ある時その能力が衰えて、いくらやっても全くうまく行かなくなりました。その時のあなたをイメージして下さい。」と教示さ

れた。このようにして各自の有能感を引き下げる self-image を持たせることによって、現在より negative な能力認知を引き出した。その後「その時のあなたはどのような気持ちですか」と、気分測定尺度が再び評定された。

- ⑤同様に、現在学業に対して持っている各々の無能感のレベルとは別に、いずれの子どもについても何らかの達成に関する無能感を等しく認知させるために「1)他の人と比べて、自分で自信がないと思っていること。2)人に対して恥ずかしいと思うこと。」について自由記述が求められた。
- ⑥能力認知 positive 条件での気分を測定するため、「あなたが自信のないことまたは恥ずかしいと思っていることが、ある時あなたががんばったことにより、その能力がついて、いつもとでもうまく行くようになりました。その時のあなたをイメージして下さい。」と教示された。このようにして各自の無能感を引き上げる self-image を持たせることによって、現在より positive な能力認知を引き出した。その後「その時のあなたはどのような気持ちですか」と、気分測定尺度が再び評定された。

<結果と考察>

A. depression 傾向の子どもと普通児の抽出

depression 尺度得点の分布を描いたところ、ほぼ正規分布に近い形が得られたため、平均値(M=20.03)を中心に上下.5SDずつ区切った範囲に含まれる割合を基準にして、まず中央の-.5SD~+.5SDに位置する子どもを普通児として抽出し、+1SD以上に含まれる子どもを depression 傾向のある子どもとして選出し、以下の分析で用いられた。したがって、今回対象とされた被験者は、depression 群(以下D群と略す)11名、普通児群(以下N群と略す)27名、合計38名であった。

B. 能力認知の違いによる気分変化

各被験者につき3回評定がなされた気分測定尺度の評定値から、下位尺度である Positive Mood・Negative Mood・Arousal Level の3つの得点が算出された。これら各々の気分得点について、2情緒状態(D群・N群)×3能力認知(positive・neutral・negative)の繰り返された分散分析がなされた。

まず、Positive Mood の変化は、図1と表1に示された通りである。能力認知の主効果が見られたが、交互作用も有意となっているので(F(2,72)=8.662, $p < .01$)、この結果は幾分限定される。単

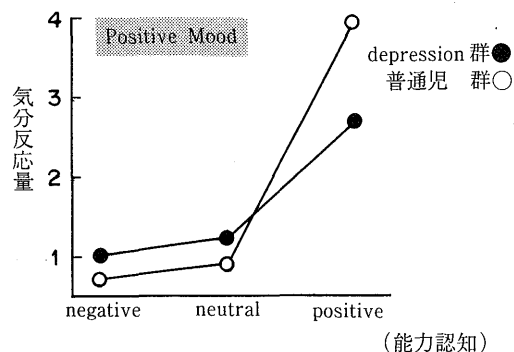


図1 depression・普通児群の能力認知による Positive 気分

表1 2情緒状態×3能力認知の分散分析表

Source	SS	df	MS	F
Between Subj.				
情緒状態(A)	0.560	1	0.560	1.944 n.s.
error	10.368	36	0.288	
Within Subj.				
能力認知(B)	3.952	2	1.976	10.681**
A×B	3.199	2	1.600	8.662**
error	13.320	72	0.185	
total	31.399	113		** $p < .01$

純主効果の検定の結果、能力認知 positive 条件での D群・N群の間に有意な差が見られた(F(1,108)=16.265, $p < .001$)。さらに、D群における能力認知条件間(F(2,72)=26.663, $p < .001$)とN群における能力認知条件間(F(2,72)=82.681, $p < .001$)で差が見られ、Tukey法による多重比較の結果、1%水準でいずれの群も、能力認知 positive 条件と neutral・negative 条件の間で違いがみられることがわかった。

以上のことから、自己の能力について positive な認知を持ったときは、D群・N群いずれも Positive な気分が生じることがわかる。生じる気分の大きさはN群に比べてD群は小さいものの、悲しみや不安の感情が強いと言われる depression の子どもであっても、positive な自己能力のイメージを持つことにより、Positive 気分が有意に増加することが見いだされたのは興味深いことである。一方自己について negative な認知を持ったときは、いずれの群も neutral の時と同じ程度の気分であり、Positive 気分が減少することはないことも明らかにされた。故に仮説②と③が証明された。

次に、Negative Mood についての変化は、図2と表2に示された通りである。能力認知の主効果のみが見られた($F(2,72)=6.132, p < .01$)。Tukey法による多重比較の結果、1%水準でいずれの群も、能力認知negative条件とneutral・positive条件の間で違いがみられることがわかった。

従って、negativeな自己認知のときにはD群・N群いずれも有意にNegative気分が喚起されることがわかる。neutral・positiveな認知のときには気分に差がみられなかった。前のPositive気分の結果と併せて考えると、能力認知の変化によって気分が明らかに影響をうけていることが見いだされ、仮説①は実証された。

最後に、Arousal Level についての結果は、図3と表3に示された通りである。やはり能力認知の主効果が見られた($F(2,72)=7.941, p < .01$)。Tukey法による多重比較の結果、5%水準でN群の、能力認知negative条件とneutral条件の間と、positive条件とneutral条件の間で、有意差がみられることがわかった。D群ではいずれの能力認知条

件でも差は見られなかった。このことから、普通児では自己の能力認知がより好ましくなったり、より悪くなることによって、neutralの時と比べてarousalが喚起されることがわかる。それによってpositiveやnegativeの気分を生じているのであろう。一方興味深いのはD群である。positive・negative気分をほぼN群と同様に生じているにもかかわらず、arousalレベルはneutralの時と変わりが無い。depressionの子どもはN群の子どもと同様に日常さまざまな経験をしているにもかかわらず、その抑鬱の感情が変化しにくいのは、このarousalレベルに関係しているかも知れない。いずれにしてもarousalレベルについての研究は端を發したばかりであり、今後の興味深い研究課題として残された。

以上3つの気分について見てきたが、しかしいずれの気分についても、情緒状態の主効果は見いだされなかった。D群もN群もほぼ同様な気分の変化を呈していることがわかる。その理由の1つとしては、能力認知neutral条件での気分に差がみられないことから、D群の抽出にはdepression測定尺度を用い

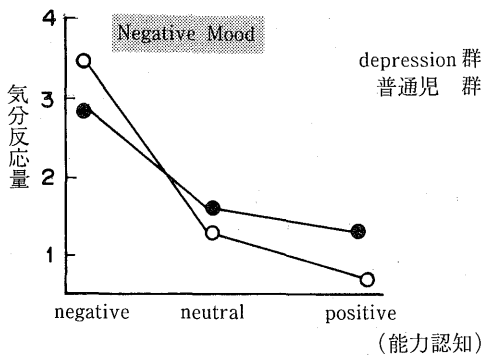


図2 depression・普通児群の能力認知による Negative 気分

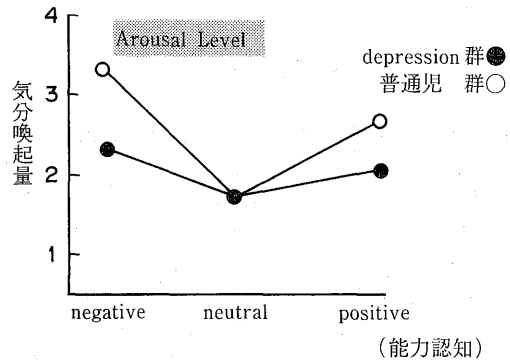


図3 depression・普通児群の能力認知による Arousal Level

表2 2情緒状態×3能力認知の分散分析表

Source	SS	df	MS	F
Between Subj.				
情緒状態(A)	0.013	1	0.013	0.027 n.s.
error	18.000	36	0.500	
Within Subj.				
能力認知(B)	2.502	2	1.251	6.132**
A×B	0.963	2	0.481	2.358**
error	14.688	72	0.204	
total	36.166	113		**p<.01

表3 2情緒状態×3能力認知の分散分析表

Source	SS	df	MS	F
Between Subj.				
情緒状態(A)	1.852	1	1.852	1.412 n.s.
error	47.232	36	1.312	
Within Subj.				
能力認知(B)	5.961	2	2.806	7.941**
A×B	0.697	2	0.348	0.928**
error	27.009	72	0.375	
total	82.751	113		**p<.01

たにもかかわらず、depressionと思われる子どもはほんの少数しかみあたらず、ここで用いた被験者はdepression傾向がやや高いという情緒状態であったため、neutral条件下では差が見られなかったと思われる。したがってその他の気分変化についても普通児とそれほど異なった傾向は示さなかったことも考えられる。今後明らかにdepressionとされる子どもについて、同様の手続きを用いてその気分変化をみることも課題ではないかと思われた。

<全体的考察>

本研究は、これまで考慮されてこなかった達成行動における「気分」という新しいテーマを取り上げ、「気分」に及ぼす自己の能力についての言及の役割、すなわち「能力認知」の影響について注目し、検討を試みたものである。その結果、能力認知がpositive・negativeに変化することにより、気分が変動することが明らかにされた。同時にNegativeな自己評価によって、Negative気分が増加することから、depressionの決定因としてnegativeな能力認知があげられることが推測される。

本実験では、気分及ぼす能力認知の効果を調べるために、能力認知は常に個人内での高低の認知を引き出すことによって操作された。したがってここで言う能力認知は、他者と比較して能力認知が高い低いということではない。

ここでは、相対的な能力認知(有能感)の高低が気分及ぼす影響をみたのではなく、各自の中での有能感が下げられたとき(能力認知negative条件)と無能感が解消されたとき(能力認知positive条件)に気分がどのように影響されるかを、depression傾向の強い子と普通児について比較するための実験計画を用いている。これによってすでに持っている能力認知のレベルにかかわらず、すべての子どもについて、自己についての認知を変容させれば、気分が変えられるかどうかを実証するためである。その結果、以上のような知見を得、Beck(1967)の提示したような認知的セラピーの可能性が示唆された。教室場面において、depressionの子どものみでなく、すべての子どもについて、やる気を失っているときの気分の変容をはかることを、Positive気分とNegative気分の相互の観点から試みていき、そのストラテジーを確立していくことが今後望まれた課題であろう。

また「気分」と「能力認知」の検討を試みたこと以外に、本研究の意義とされるのは、気分の捉え方をpositive・negative・arousalの3点から試みたこ

とであろう。かつてdepressionや不安傾向の強い子や攻撃性の強い子などに対する、心理測定検査はすべてnegativeな感情についてのみ評定を求めた項目からなりたっており、Positive Moodは評定されてこなかった。ところが本研究ではPositive Moodについても評定されたことによってこれまで見落とされてきた新しい知見をみいだすことが可能とされた。

その代表として、自己の能力が下げられた認知をもってPositive気分は影響を受けず(下がらない)、同様に能力認知が上がってもNegative気分は影響を受けない(下がらない)という事実が挙げられよう。これは本研究で見いだされた知見としては、これによって非常に関心のある示唆を与えてくれる。まず1つめには、Positive気分が上昇したとしてもNegative気分が減少せず、その反対も言えることから、Positive・Negative気分ひいてはその構成要素である個々の感情は、かつて言われてきたようなbipolarな一次元構造ではなく、2次元構造をしていることが暗に推測されるものである。Positive気分とNegative気分はそれぞれ独立に、個人の認知や周りの状況に反応して生じるものであることが推測される。

2つめには、これを臨床場面で考えたとき、depressionの患者についてもpositiveな自己認知を与える事によって、Positive気分を増加させることが可能であり症状の改善に効果があるであろうことが示唆された。ところが、depressionの患者はもともdepression感情や悲しみ・不安の感情を強く持っているのが特徴とされるが、彼らは例えpositiveな自己認知を持つような経験をしたとしても、Positive感情は増加しても強いNegative感情には何も影響しないため、depressionを除去することは難しいことが示唆されよう。この点、本研究からの示唆にもとずいて今後さらに、Positive気分とNegative気分の2つの観点から、depression患者のNegative気分の変化について、より検討を重ねていくことが必要であると思われる。

また、自己の能力が下げられた認知をもってPositive気分は影響を受けず(下がらない)、同様に能力認知が上がってもNegative気分は影響を受けない(下がらない)という事実は、別の観点から言えば、自己のpositiveな認知によってPositive気分が喚起され、negativeな認知によってNegative気分が喚起されると言えよう。positiveな認知によってNegative気分が減少したり、negativeな認知によりPositive気分が減少しないのは一般的予測と反して興味深い。

これは自己の認知と一致した気分が喚起されるということであろうか(逆にいえば自己の認知と一致しない気分は喚起も解消もされずそのまま残る)。最近、記憶の分野で、課題遂行時の気分と一致した内容のtaskは一致しない内容のtaskより、よりよく記憶されることが確かめられている。本研究結果もこのような記憶と感情の連合ネットワークの中で解明されるのではないかと考えられる。本研究結果から逆に推測するに、この記憶の実験の場合、課題遂行時の気分と一致したtaskをより記憶したからといって、気分と一致しないtaskの記憶がより阻害されることはないように思われる。あくまでも逆の気分には影響を及ぼさないのではないかと考察される。

要 約

本研究は有能感の上昇及び下降が認知的に操作されることによって、達成の分脈における気分が高められたり低められたりするかについて検討された。そのために被験者に、失敗した自己イメージと成功した自己イメージをもたせることによって、各自の有能感が操作された。小学校6年生について、抑鬱傾向の高い子どもと普通児を選び出した。これらの子どもの間では、能力認知の仕方によって、気分が

変動することが見出された。すなわち、自己の能力認知が下げられた認知を持ってPositive気分は影響を受けず、同様に能力認知が上がってもNegative気分は影響を受けない。以上のことから、認知的セラピーの可能性が示唆され、さらによりよい自己の能力認知を導く方法について検討する必要性について考察された。

引 用 文 献

- Barnett, M.A., Thompson, M.A., & Pfeifer, J.A. 1984 Perceived competence to help and the arousal of empathy. *Journal of Social Psychology*, **125**, 679-680.
- Beck, A.T. 1967 *Depressions, clinical, experimental and theoretical aspects*. New York: Harper & Row.
- Coleman, R.E. 1975 Manipulation of self-esteem as a determinant of mood of elated and depressed women. *Journal of Abnormal Psychology*, **84**, 693-700.
- △ 丹羽洋子 1989 学校場面における気分の変動について 日本心理学会第53回大会発表論文集, 438.
- Velter, E.A. 1968 Laboratory task for induction of mood states. *Research & Therapy*, **6**, 473-482.